

2022年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	清田 政秋
研究テーマ	本居宣長の哲学的思考の源泉としての京都遊学時代の歌論研究—本居宣長は仏教の哲学的思考をどのように自らの学問に取り入れたか—
研究概要	本居宣長には心と事と言語は一体不可分の関係にあるとする哲学的思考がある。その思考は仏教に由来し、中世歌人たちの歌論の中にその影響を見出すことができる。宣長は京都遊学時代に、歌論研究の中から歌とは何か、心はいかなるものであるかの問いを立て追究した。本研究はその思考過程を追い、宣長と仏教思想との関連性を明らかにする。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>本年度は、宣長が京都遊学期に学んだ藤原俊成の歌及び歌論に、天台宗の、対象世界の物とそれを捉える心は一体不可分の関係にあるとする思考を見出し、宣長の「物のあはれ」説との関連性を追究した。宣長自らが「物のあはれ」の考え方は、俊成の「恋せずは人は心もなからまし物のあはれも是よりぞ知る」の歌がきっかけとなったと語るが、研究史では俊成の歌からいかにして「物のあはれ」説が成立したのかの解明は不十分であった。本年度の研究は「物のあはれ」説の成立に、俊成が拠り所にした天台智顛の『摩訶止観』の哲学思考が関連することを明らかにしようとした。そのために、宣長の京都時代の歌論研究を調査するとともに、俊成の歌及び歌論について先行文献を参照しながら分析し、『摩訶止観』にある仏教の哲学的思考がどのように俊成に影響しているかを明らかにした。その上で「物のあはれ」説の成立と仏教の哲学的思考との関連性を明らかにした。</p>
2. 学術論文・学会発表等	<p>〔論文等〕 単「本居宣長「物のあはれ」説の成立と仏教の哲学的思考」『宗教研究』406号、日本宗教学会（2023年6月刊行予定、査読有）</p>
3. 今後の課題	<p>先行研究の多くは「物のあはれ」説を、『源氏物語』を主とする平安朝の歌・物語に限定された考え方であるとする。だがその捉え方では宣長における源氏研究と古事記研究が断絶してしまう。日本文芸の本質を捉えたと言われる「物のあはれ」説には、その成立過程に仏教が関連したのみでなく、「物のあはれ」説そのものの根底に仏教の哲学思考がある。宣長は、心が動いて感ずることが「物のあはれを知る」ことであり、それは「物の心・事の心を知る」ことであると言う。今後の課題は、「物の心・事の心を知る」とは何かを明らかにし、その基にある仏教哲学思考を解明してその思考が宣長の学問全体に一貫することを明らかにすることである。</p>